

## 一枚摺

——手銭家所蔵資料紹介（六）——

佐々木 杏 里

（公益財団法人手銭記念館学芸員）

### 摘 要

前稿に続き、出雲市大社町手銭家に伝来する文芸資料の中から一枚摺を紹介する。この資料は江戸時代の、大社における文芸活動の実態を見る上でも、地方における文芸享受の実相を知る上でも、多くの示唆を与えてくれる貴重な資料である。

キーワード…一枚摺、俳諧、狂歌、杵築文学、手銭記念館

### はじめに

所蔵資料調査を続けるなか、二〇一九年に一枚摺と直筆一枚物、あわせて21点を収めた袋を新たに確認した（T949）。21点のうち、3点は既出資料と重複（T1534, T1597, T1757）、1点は直筆一枚物である。本稿では、重複資料、直筆一枚物と、虫損のひどい2点を除いた15点を紹介する。年代不明な資料もあるが、これまで同様、ほぼ文化年間（手銭家五代有秀時代）以降に摺られたものと考えられる。

53（T94917 安政七年）は、33名による狂歌の一枚摺である。まだ、ほとんどの人物が特定出来ていないが、おおくが杵築の人々であろうと類推される。幕末の杵築において、和歌・俳諧に加えて狂歌も広くおこなわれていた事を具体的に示す資料である。

今後、俳号に加えて狂号についても、人物を特定していくことが必要である。

### 〈凡例〉

概ね所蔵資料番号の順とし、『手銭家所蔵資料紹介（四）、（五）』（二〇二〇、二〇二一）で紹介した直筆一枚物・一枚摺に続けて通し番

号をつけた。

通し番号に続けて、分類(和歌、俳諧などの別)、所蔵資料番号(N  
O)、資料寸法、資料情報(袋、など)、作者本名(地域)、製作年、翻  
刻の順に記した。

翻刻にあたり、私に句読点を補い改行も適宜改めた。概ね通行の字体  
にあらためたが、一部原本の表記を残した。

一行空き、空行に記された「○」「レ」等はそのままだ。

難読の箇所は□で示し、推定できる文字は「レ」で囲んだ。

落款はへで囲み、判読できた物については記した。

参考のため、原本の図版数点を最後に示した。

〈翻刻〉

48 俳諧

No. T94911

寸法 縦35・4 cm 横48・7 cm

安政三年(1856)

鶴もこのよことをのふる弥生かな  
東風吹や玉たれこしの鶴の声  
このとや鶴のかけさす初日の出  
鶴もこのことほき受る春日かな  
あかぬ日の永き雲井や鶴の声  
くらふれは鶴はをさなし君が春  
鶴むれて呼や八千代の君か春  
鶴ましり千代よふ諷ひはしめ哉

鳳口 鶯川 湖春 風居 其柳 梅左 宇石 梅生

君か春久しと鶴も来て遊ぶ

むら鶴も来て舞へ君か御代の春

霞むほと千代ははるけし鶴の声

あや霞鶴も齢をあやかりて

麗や君か真空を鶴の舞

羽廣うに鶴のむかふや初日の出

鶴も寿を君にあえるや今朝の春

鶴番ひ住や老せぬ松の花

大やうに羽をのす鶴や春の空

あた、かや空に久しき鶴の声

鶴も来て春を寿く清館哉

長閑さに高飛鶴をみもの哉

明す、む春のけしきや鶴の声

羽をのして寿うたへ春の鶴

長閑さは音にもしるる、松の鶴

千代こめて小松引野や鶴の声

羽は、きも千代の音なり春の鶴

羽をのして初日受るや松の鶴

月も日もおそき門とや春の鶴

野に山に八千代をふれて春の鶴

芹つむや千代はむれゐる沢の鶴

うちはふく音ものとし小田の鶴

月夜にも高く千世よへ春の鶴

澗里 立我 凸海 六屋 鶯柳 琴松 少年 尺菊 雲山 一海 窓月 露白 甲乙 二本 寿人 里仙 起友 有頼 安秀 さの子 有「芙」 有水

鶴のある野を幸ひや小松引  
 曳鶴や君か八千代は空にみつ  
 春の日の長さほまれや松の鶴  
 吾朝に千世よはひけり春の鶴  
 鶴舞や遅き日かけをあやなして  
 舞うて来て鶴もかさねよ君か春  
 大空や春あらためて鶴の声  
 鶴の巢や松のみとりも伸進み  
 梅か香のひろかる空や鶴の声  
 初空や千代のひかりを松と鶴  
 千世をえた鶴にまさりて館の春  
 舞うて来て鶴も祝ふや千世の春  
 初夢の覚てまことの鶴の声  
 遠近の山も笑ふや鶴の声  
 松を見て鶴も十回る弥生かな  
 舞鶴の中に初日の匂ひ哉  
 あたゝかや千とせほく羽を延す鶴  
 鶴も田てあふくことしの初日哉  
 清翅の下住よしや春の鶴  
 鶴引て君のみしめる千とせ哉  
 年ごとに若葉を貢け小田の鶴  
 鶴の声千里の春に届きけり  
 今年より鶴も来馴れよ梅の花

汀雪 雲浦 桃右 得々 画竹 婦一 有得 蓬雪  
 可一 奇山 九十五翁 たま女 秋水 歌録 花朝  
 「青」<sup>虫掛</sup>坡 仁晁 紫村 加録 千尋 かしく 加水 乙雅

春の野や舞とあさると鶴あまた  
 鶴も来て覗く垣植や梅の花  
 舞鶴も袖ひるかへせ花の春  
 敷島の春は日永し鶴の声  
 鶴の来てのとかさますや館の春  
 初日かけ輝くそらや鶴の声  
 鶴舞て弥うつ高し春の空  
 賑はしき雲井の春や鶴の声  
 鶴子孫揃うて舞や初日空  
 面白う霞を汲や鶴の声  
 鶴もこのことほきにくむ霞哉  
 しら鶴のしらぬよはひや君か春  
 幾番ひ鶴も并ひて千代の春  
 鶴あまた六十一文字に并ふ春  
 旭に向て千代よふ鶴や君か春  
 君か春明ぬる空や鶴の声  
 小松野に鶴の居并ふ子の日哉  
 長閑なる酉をこゝろや鶴の春  
 鶴は舞すゝめはおとれ君が春  
 子の日野や鶴見かてらの人通り  
 所得しさまやのとけき松の鶴  
 君か春あふくや鶴の羽風にも

里村 南逸 艸之 其流 千魚 寿来 春齋 松悦 和水 市豊 集甫 霞風 秋計 遊然 市月 五尺 蛙「栖」 糸泉 守比古 行女 文送 梅年

芦原や春のみほきをふれる鶴

凡和

この君にあえむと鶴や曳残る

眉慶 対美

君ませはよしとて鶴は引にけり

安政 千海

鶴むら、初日さす賀の羽振かな

發起 松皮

永き日や鶴も幾度舞もとる

全 慎俄

安政丙辰春弥生吉辰

〈イツモ琴吾刀花押〉

49 俳諧

No. T94912

寸法 縦19・4cm 横25・6cm

袋 「春興」

安政三年(1856)

さうくとさすや餘寒の竹の月

文雀

早蕨やたまゝあれは蔭の中

雲春

上下を着て見直すや初曆

仙露

高過て盛りはしれす松の花

夏木

余所へ往た様に居るやまつの内

さの女

みなと入るとうかれて舟の猫

眉慶

出代の犬にもこほすなみた哉

有輶

受羽子の隙なき中をよそみ哉

鶯川

朝東風に引脚早し小田の鶴

月砂

白魚や皿の赤絵のすき通る

安海

行燈のか、け終りやはつ烏

対眉

朝月をつひに鳴けす雲雀哉

梅通

元日や八雲おろしを膝の上

洗羽

丙辰のはる

50 俳諧

No. T94913

寸法 縦19cm 横51・9cm

山の夜は明てもさひし秋の風

タキ 馬州

くれて行秋を助くる紅葉かな

キツキ 有輶

月かけも走るやうなり落し水

上ノ「郷」花井

夕ぐれの目先へ来り花木権

シンチ 春釣

目をやれば落る実もあり草紅葉

クノ 花眺

駅入も暮てうれしや旅の月

キツキ 月清

廓てもわすれては居ぬ暑かな

タキ 馬得

片枝は山の色なりはつ紅葉

ニタ むら女

我打もあはれ雨夜のきぬた哉

キツキ さの女

葉と花をわけて提るやかきつはた

大ツ 昌陽

す、しさや庭木を洗ふ通り雨

連玉

降ぬ日に笠の曠する田植かな

玉水

秋来ぬと身に覚えけりかやの中

チイノ宮 一遊

鐘聞ぬ里も日くれて引板の音	、	柴織
手入せぬ菊うつくしや垣の外	アラキ	白砂
麻からの箸より白し蓮の飯	入ナン	無足
夕立のあとやつゝいて蟬時雨	コシ	琴山
七夕やまた露しまぬ袖の風	ウトウ	凸海
片向て露吐さまや百合の花	カンハラ	嘯月
すゝしさや伸した足に竹の影	、	貞〔寧〕
降してそれとしりけり虎か雨	、	玉光
〔勝たの〕て人好のする角力哉	キスキ	眉山
灯を渡す手元の見ゆる花火哉	、	釣月
新わらの苞に祭の宮笥かな	、	如雪
くれかゝる山の端白しそはの花	、	桃年
三日月の入あし長し草紅葉	ホウシタ	光林
名月やいつ夜の更て露の青	、	龍山
はらくと竹の雫やけさの秋	ニタ	岐山
稲垣の先に小家の煙りかな	、	朝霞
朝顔や小流れはまた夜の青	、	摘宣
くらしよう成た嘶しや天乃川	キツキ	有聲
大空に秋のみちてや露の青	イハミ	一痴
白波の雨に落つく卯月哉	、	一盛
枝折戸に附て吹けり秋の風	、	〔窓〕 <sup>虫損</sup> 山
澄月を守る様なり草の露	、	春□
山かけや草の月夜を鳴水鶏	、	松花
下りたれはまた霧深き禁哉	、	鶯和
立姿凄し月夜のけし畠	、	露芳

一枚摺 ― 手銭家所蔵資料紹介(六) ― (佐々木杏里)

羽衣をかへしうとふや月の友  
、  
青池

けさ立し秋行と、く夜空哉  
里に引ひたも深山のひゝきかな  
凡和 公成

未の秋  
凡和

51 俳諧  
No. T94914

寸法 縦12cm 横15.3cm  
作者 手銭有軻  
袋 「三節 白澤園」

〈新春〉歳旦

御鏡の白さにも眼のさめる哉

年尾  
わかれ行そらもうれしや除夜の鐘

春興  
うくひすや園生こもりの朝月夜

右酉の春  
有軻(〓)(〓)

52 俳諧

No. T94916  
寸法 縦19.1cm 横52.4cm  
袋 「筆の林」

なてしこに十三か年のひゝきかな  
木の下「へ」なれは顔かほふく田植哉

長風

並松や六月ほとの時はなし

竹斎

昼ともす灯の涼しさよ蟬の声

阿咩

夕貞やかこち顔なる片折戸

東口

やくそくの蟬振舞よ寺の山

米彦

松葉かく家もある也夏の月

東雨

夏菊はうれしきものよ松の陰

馬輔

檜の葉を引起したる清水哉

吉苗

みしか夜や浮巢に似たる木津の宿

雪雄

花見せてはしらかしたる鹿子哉

東陽

満月のはしり出たり花檣

花叔

53 狂歌

No. T94917

寸法 縦39cm 横51.7cm

安政七年(1860)

刺竹宮人

睦ましといふ月立て野へみれは嫁菜に交る露のしうとめ

あた足もふますにかせく商人はやまでも年の坂やこゆらん

好文

たらちねの親しめこしめ打はへてはや春風のふくの神たな

鏡餅ついてもおへは年月はあんの外にもうつりゆくなり

十八公

朝ほらけまた質屋より取ものもとりあへぬ間に春は来にけり  
こたへせぬ生海鼠の如く懸取にぬらくらしたる年のくれかな

〇

釣沖魚

門松の雪の先触むらゝに駄つきよくも来たる春哉

年月は立事はやき角力取の春におし出す土俵際かな

平於加之

懸合の段もかはりて春たちぬ霞の幕を引あけの空

神主のはらひ給へは常なれと口はかりなる師走つこもり

酒上是飲

あらたまる春は霞の衣手に日のしかけたる空のうらゝか

一もんかみなく無事て百銭のさしも愛たき春はきにけり

中立

白彦

十露盤に入れたる事も白雪の積りはつるゝ年の暮哉

年浪ををしむ心は大海をねてせくとしもいふへかりけり

千卷舎

笹比古

町人も上下着ればそろ盤のけたかへみゆか今朝の春哉

注文の紙を残らすくゝひなは未の暮はたのしからまし

川面厚輔

子息去年の冬よりいといたう煩ひけるに辛うして快気し侍るをよ

ろこひて

本ふくのふくは内なりいり豆のはえて追儺に春は来にけり

月と日はめぐりゝて摺鉢の底のみそかと成にけるかな

曲水亭

三千歳

ちり紙の塵くはつとはるたちぬ花のしつくも落あへぬまに  
としのくれ算用合て銭足らすたらすは有とも穴とみましや

三島

素顔

きのふ迄破れかふれとおもひしにあまり障子を春は来にけり  
総わたりして行年の軽業のくるりと春にあすやかへらん

磨丸  
韻  
口砥舎

借金は日本晴と今朝なりてから金盛の春は来にける

かけ乞のはけしき風を間似合の紙の一重にへたてつる哉

○

早々返上

鏡台のふた明かたの薄霞嬉しく向ふはるの姿見

何も角もかけに乘行日間の駒あすのはるひのしめくゝりせん

能辨法師

一年を三番さうくくらすのは何より以て安うさふらふ

茜さすはつ日のあしの立なへに二見のうらそかすみそめつる

竹内寿具根

鬼かはらあさむくほどの顔つきも歌ふくに成今朝の春哉

白もたぬ賤かふせやも年くれて世につき交る餅つきの声

佐野雪女

天のはらか、ゆる程の横雲に恵み栄たるはつ日かけ哉

うめといひ竹と祝ひて除夜の風呂あかなく暮るゝ年にも有哉

京

鴨川岸枝

門松にかゝれる羽子もおもしろしヒイフウ御代の春の言の葉  
としのくれ餅つく音も神さひぬきねか鼓の音にかよひて

江戸

田蓑鎌人

立春に先をさまりし船心かへりみらるゝあとの年波  
往は順来るは逆を易なりにめとはたてゝもをしき年哉

蒼楼かしく

冬と春と夜の間にかはる品玉の種や棚引霞なるらん  
香はしき春を隣の榎杖にて味くも祝ふ大みそかかな

文庫安筆

浦嶋か玉手箱ても此やうな春に明なは嬉しからまし  
ほのつからかねの出来るも餅米のかし工合なる年の暮かな

津守比由留

はつ春を祝ふしるしの屠蘇酒の三輪の里にも松立にけり  
せつけとも又もいすりのはした錢喰ちかふてはかへる懸乞

左司廻

借金のせんたくかけし棹姫の霞の衣はるは来にけり  
せめ馬の轡の丸か出来かねて腹帯しめる大卅日哉

為貴山人

有樹

春たてはねきか妻さへちはやふるかみの結ひにかくる清皮

白足袋も鼠色にそ成にけるチイチト懸を取歩行間に

佐保姫は夜の間に衣したてけん今朝は霞の着そ始せり  
はや暮る月日とうつほ物語行としかけのをしまるゝ哉

藤原花垂

あかさりし今年も懸はくねなるに末つむけふと成にける哉

玉の舎

壁穴丸

ちよほくさといふ間にとしはくれ竹の雀の宮に春は来にけり

有聲

明かたき岩戸噺はむかしててけふはやはらく初日かけ哉

霜はしら雪のさかも木構てもふせきかねたる年のくれ哉

かくはかりかけ乞虎のふんとしにうその皮をもやらんとそ思ふ

暮てゆく年はいなはの山松のまつとせし間に春はきにけり

薄鍋行平

松風亭

時調

大方は年仕舞せし鏡餅丸てたらぬはこかね也けり

古史拔足

門くの松もかすみて雑煮たくなへてかまとは賑にけり  
竹杖のふしくに有つこもりの大つもこりはつきとまり也

阿可良

橘丸

安政七庚申春をむかへて  
きのふ社顔赤めしか年ひとつまさるめてたき春は来にけり  
塵ひねる人はかり来て金持のほこりにほこる年の暮かな

唐はいさしらすにはんの松竹に今朝立ならふ千代の春哉  
懸乞に三三九とう来てみれば着たる帽子に朝もいたさず

竹下

千尋

54 俳諧

No. T94919

寸法 縦17・6cm 横44・1cm

作者 白川芝山

ある黄金家にて十露盤のかけ引など物しける時我庵のことをつふ  
やく

門柴の酒気か出来てのとかにもはなうたうたふ花の初春  
おもひきやお玉しゃくしの中にあて何もかはすの年の暮とは

沈丁亭

三宝のむすひ昆布も打とけてみつからいふ春は来にけり  
いとにふきひつしの歩みとおもひしに暮行年は猿へ一飛

玉庫歌種

新らしき巨燧疊を敷しまのあたり間近く春は来にけり

唐の王右丞春詩を能くし画をよくす。故に詩中に画有、画中に詩有。吾国の許子は絵を俳諧のために好み、俳諧は絵のために愛すといへり。予、総角の頃より書画を好めとも画と俳の親みを悟らす。只秋夜の長きに燈を乗、春日の遅に筆を閣し、一椀の茶に心を洗ひ、一枝の花に目を慰め、適一二句をすれとも、あなから風狂の鑑にふれて優劣を定る事もなし。近頃下総の太笥子吾庵の西南百歩にして僑居す。よて、旦に酔ひ夕に語り、頻に此道にうか



れうかさねぬ。先に朱樹翁、俳諧のうかれものには梅干もきかすと自感の文に書のせたれば、今更忘るへきの薬需るにもあらずゆも、うかる、ならば、四方の好人に文をもて交をむつひ、其家との風嘯あたなるをも観はやと、此媒を笥子に托すればよし、うかれよくといふに、うかれそ、ろに赤き心をあからさまに識す。乞ふ、諸高士四時の玄珠を惜む事なかれ。

草も木も囀れ月の朝霞

芝山

寝ころへはすみれに用のたることよ

太笈

55 俳諧

No. T949-110

寸法 縦19・4cm 横52・5cm

作者 文蛇

文化十四年(1817)

寿 (画) 紅椿

白澤画

七十翁蒲葉

松も竹も見し世のはるや一むかし

手を折て父か年をかそふれは十つ、七つのおよひを開けり。唐土人は希なりといふめりと。わか家の元祖より十三代の眞子、中村八良神門大刀柝氏里は百廿三歳を經、妻は百十六歳をたもてり。其比も希なる事にや、鎌倉殿に召れて御衣太刀馬など種々たまものありけり。また十七代のち中村の庄司岳八角神門乙名并山は

一枚摺―手錢家所藏資料紹介(六)―(佐々木杏里)

九十歳にて若き男はらを集めすまひをとりけるに勝もの更になかりししとなん。夫よりこなた十九代のほとは古希の齡をすくる人をこ、聞えざるに、今我父こ、ろにしたかふ春をこゆれと杖の力も馬のあしもからて、百里の旅路をいとやすらかにゆきかひするは二人の翁の齡にやあやかりなんと、心のよるこひ山のいた、き海のそこみと極りなき事となくくいひ出つ。

文化十四のとし

いつもの文蛇

丑春

春立や山も八つ尾の玉椿

太平の世の真中や粥はしら

年尾

松うりか小きつ、につ□ひ梟

春興

露磨

よる浪のくたけもやらす春の海

〈襄齋〉

56 俳諧

No. T949-111

寸法 縦39・9cm 横26・3cm

鶯のこたまに雪のなたれけり  
樹々の芽のたしかになりて月夜哉  
春の月雲は水辺にきゆるかも  
鶯の声やいよく、日のめくみ  
春の日や雁と寝もせず雲の上

孤螢

波九

斗由

稲石

染井

日の出ぬうちに見へけり日の永さ

白乗改眞銀

さしの鳴山より出たり薄けむり

巴水

春雨に火を焚く山の木の間かな

梅角

芝の戸の留「主」もひかんの入日かな

蓬山

鯨売まてはなしせん春の雨

路甫

華あれは花に對して朧月

乙峰

扱こそといれは柳の小寺かな

蓬春

ゆらくと正月過の沼太良

呉山

文通

難波 升六 梅持の宿は夜のなきはかりなり

洛 蒼虬 松ちつて見れば霞そ人の門

57 俳諧

No. T949112

寸法 縦16・4cm 横44cm

作者 雲州木次連中

文化九年(1812)

雲州木次連中

文化九壬申のとし

歳旦

ことふきて先汲そめん春かすみ

竹里庵以聞

年ひとつ若ふ「左」たり門の松

寿松

雪の竹おき戻りけり初日の出

素川

明の春すかた見へけりうす霞

宜泉

はつ空をわたして星の二つ三つ

初孫の笑ひすかたや福寿艸

屠蘇酒に下戸の酔見る朝かな

春明て何所見ても気の勇ましき

春興

立よりて顔撫られん柳かな

龍宮へ道行きかゝる汐干哉

出代や乳をのむ子にもいとま乞

消残る雪間くや摘わか菜

咲梅の香はへたてなし垣隣

気みしかな人に見せはや糸柳

焼け芝に青みの付くや春の雨

日あたりの屋根に初出や雀の子

風にまた寒いくせあり梅の花

鶯のはつ音を拾ふ山路かな

朝の事わすれそふ也日の永さ

杣の音はかり聞へて霞かな

咲たりな垣はあれとも梅二輪

わか草や駒の遊びもひろくと

霞よりうへに声ある雲雀哉

いろくの花に酔ふてや舞小蝶

長閑さや霞にわたる嶋小舩

ゆき解にちからの出来し水車

桃さくや雫たりきる山屋敷

楽之

可洒

淇水

歌川

可洒

楽之

歌川

智盛

素川

宜泉

淇水

東行

桃之

器水

花蝶

柳雨

興山

玉芝

龜水

花川

海月

寿松

以聞

No. T949・14

寸法 縦17・6cm 横49・7cm

袋 春興

安政三年(1856)

はつ夢に見た人の来る朝戸哉

鶯川

掃そめや昨日にかはるあしさはり

蕉圃

な、艸やむかひ合せにはてな音

月砂改重羽  
有軛

山七歩をりて眼はゆきさくらかな

くら子

青柳に舟のけふりのなひきけり

佐の子

つきありくやうに雉子なく山路かな

藪みちや落るつはきもひとさかり

文雀

供まちの鈴にも来たりす、めの子

其葉

つくはねのはつみに「盈」る汲茶哉

可来

戸明れはうめも有けりふく寿草

夏木

市は夜の賑やかにしてわすれ霜

竹子

おもむきは絵にも書れすはるの月

吾春

○ はつ夢は人をえらひて吐しけり

秋水

大ふくや勝手の遠き笑ひ声

松皮

な、草やそろへるまでの小骨折

画作

ちか頃の分家と見えて梅の花

有得

そくさいな膝つき合ふて御慶かな

和木

若水の余り水屋へまはしけり

集甫

おさかりの行届いてや野の静か

蛙栖

総て有窓の輪七五三の戦き哉

一水

七艸のおほつかなくも揃ひけり

蓬雪

常に此の気持て居たし蔵ひらき

帰一

○ 旦那から先へきほふや小松引

つね子

柚か家も宮こめきけりはつさくら

たま子

文音

笠とれはことしのはれや井のほとり

百年

雲少し有も風情やはつ日の出

遊水

○ しら魚や鉢の赤絵の□き□り

安海

春ふかきいろやみとりや岡のまつ

慎俄

舞猿の鈴のみはるの細音かな

凡和

鶯も愛はおよはしす、めの子

梅年

すりもの、画図やことしの筆ためし

雲浦

おさかりに交りてたのし雪の花

対眉

さちの舎の南亭に頭陀をおろし七十の春をむかふ

堂サイキ洗羽

書初やかさねしとしも荷にならす

〈琴五刀 花押〉

丙辰のとし

花押

59 俳諧の連歌

花押

No. T949・15

花押

寸法 縦14・8cm 横59・7cm

花押

一枚摺―手銭家所蔵資料紹介(六)―(佐々木杏里)

花押



No. T949・16  
寸法 縦19・4 cm 横53 cm  
天保八年(1837)

文信

何たいて焦した数ぞ初さくら  
折てまたおとろかしけるはつ桜  
水に気よるはしめ也散さくら  
提て来たむしろもしかす花の本  
夜に入て漏のとまるや春虫掛  
としくによき虫掛の出来てとんと焼  
日は峰にかくれて花の盛かな  
眼ふさいて朝酒のむやはるの宿  
ちらふかといふ日かはなのさかり哉  
小料理の出来て供する花見かな  
片岨や真虫掛の花に根なし雨  
人の来て支度いそぎぬ桜「かな」  
見てしるやきのふ桜て虫掛  
花にをの捨て酔ふたといはれけり

丁酉春 弥生

鼎左 林曹 井升女 一肖 楽水 千厓 蒼虬 南峨 蟬羅 松羅 秀然 馬雪 馬得 全

元日も「隙」なき菴の流哉  
年よるや母か欲する市の物  
子日には淋しからせし柳かな

元朝や物申声のいさきよし  
難波虫掛魚なき日なし年の暮  
侍「婢」にみ付られたる蔵かな

元日は元日らしき眼もと哉  
かけ乞に年惜む気のよわりけり  
夜の梅出たかり給ふ局たち

62 俳諧

No. T949・21  
寸法 縦22・2 cm 横57・4 cm  
作者 清地連  
文化二年(1805)

文化二乙丑

清地連

新月

石山や石も虫掛くかと月今宵  
海原をかけてしら波月今宵  
稲の花御代のか、みや今日の月  
月こよひふりわけ見たき須磨明石

龜尾齋白玉

露桂 波光 巴石

古水

春人

蘭阿

うち出て見る山白しけふの月

東里

月に来る人もまさこや須磨のけふ

遊枝

板ひさしあれしも嬉し今日の月

梅風

行道の竹□□あり今日の月

扇風

人橋もかゝるや勢田の月今宵

冬扇

名月や心をすます松のこゑ

雀子

山の端の雲は雲なり月の花

呂竹

燈火のひとり静けし月の留守

鳥鼠

梟のねふる木すゑや月今宵

巴柳

月こよひ波もしつけき田面かな

衝冠斎有秀

曇りても名高き月の今宵かな

二部 一勇

月清し去年のことしも夢は見す

、 柳枝

花に寝る人はあれともけふの月

、 里石

名月や折く濁す嶋の海

久村 紫翠

名月や身ふたつあらは須磨明石

、 蛙川

追加

夜た、なく木すえの猿や月の友

日々庵浦安

印へへへへ

(付記)

本稿作成にあたっては、立正大学 伊藤善隆氏に多大なご助力、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」

(二〇一六)二〇一八年度、研究代表者・野本瑠美)、同「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」(二〇一九)二〇二一年度、研究代表者・田中則雄)による研究成果の一部である。

〈参考図版〉

袋







# “Ichimaizuri” — reprint and introduction ; Documents of Tezen Family Archives (6) —

SASAKI Anri  
(Tezen Museum curator)

## [Abstract]

To reprint and introduce " Ichimaizuri ". This material is a valuable resource that gives many suggestions when looking at the actual state of literary activities at Taisha

Key-word; Ichimaizuri, kyoka, haikai, Kizuki-Bungaku, Tezen Museum,